

研究課題

異なる背景をもつ同世代とコミュニケーションする力、協働する力
およびICTリテラシーの育成をめざした外国語教育のモデルづくり

副題

～SNS等を活用した実践研究～

学校名

沖縄県高等学校中国語教育研究会ICT国際交流学習部会

所在地

〒901-0511

沖縄県島尻郡八重瀬町字港川150番地 沖縄県立向陽高等学校内

1. 本研究の背景と目的

本研究部会では、外国語の授業実践において、生徒が、学習した言語を使ってさまざまな文化的・社会的背景をもつ人たちと対話しつきあっていく過程で、広い視野を獲得し、相互理解を深めることを重視してきた。現在はさらに、外国語教育の目標として、コミュニケーション力、協働する力、ICTリテラシー、課題解決力、創造力など、21世紀に必要とされるさまざまなスキルや能力の養成を位置づけることをめざしている。また、学習者が教室内ではなく、現実社会のなかで学習した言語で同世代と交流できるようになることが小中高校の外国語教育にとって重要だと考えている。これまでも、「21世紀東アジア青少年大交流計画」で訪日する中国ほかの高校生を積極的に受け入れるなどしてきたが、一過性の交流に終わることが多く、継続的な交流や学習につなげられないことが課題であった。そこで、ICTを活用しながら、中国語圏の高校生との継続的な交流を実現し、中国語や英語をコミュニケーションの実践の場で使い、互いの理解を深めるとともに、共同活動をとおして多様な背景をもつ同世代とコミュニケーションする力、協働する力およびICTリテラシーを育成する実践研究に取り組むこととした。最終的に、以上の力やリテラシーの育成をめざした新たな外国語教育のモデルの開発を目標としている。

2. 研究の方法

沖縄県立向陽高等学校2年生の中国語選択クラスを主体に、羽衣学園高等学校（大阪）および台湾高雄市立高雄高級工業職業学校（日本の高校に相当、以下KIHS）の協力を得て実践に取り組む。

(1) テレビ会議やSNS「つながーる」(www.tsunagaaru.com、約20カ国から約1,500名の中高校生が参加、公益財団法人国際文化フォーラム運営)等を利用し、学習した中国語、英語を実際のコミュニケーションで運用する力の育成をはかる。

(2) 「沖縄、台湾（高雄）、大阪の3つの地域のつながりのよさを、それぞれの地元市民にPRするCM」づくりに共同で取り組むことで、多様な背景をもつ同世代とコミュニケーションする力、協働する力の育成をめざす。

(3) 上記の活動を通して、ICTをコミュニケーションや表現・創造のツールとして活用する力を育成する。

(4) 研究を進めるにあたって、稲垣忠・東北学院大学准教授の助言を得る。

3. 研究の内容と経過

【4～5月】

・自己紹介と家族紹介の中国語表現、中国の高校生活について学習。台湾・中国・沖縄の『清明節』の相

違点を調べ、つながるに投稿

- ・向陽と羽衣の生徒がつながるに互いの自己紹介を投稿しコメントしあう（中、英、日。以下同様）
- ・第1回TV会議：向陽・羽衣の生徒が互いに自己紹介、沖縄と大阪のことばをクイズや寸劇仕立てで紹介。後半、KIHSも参加して自己紹介。感想を「つながる」に投稿

【6～8月】

- ・「わたしのまちのたからもの」をPPTにまとめてプレゼンテーション（米田担当）。後日、つながるに投稿
- ・自分の学校生活を紹介する中国語表現、中国の高校生の放課後の過ごし方について学習
- ・つながるに、学校紹介やまちの紹介を投稿
- ・身近な生活の中の台湾や大阪とのつながりをインターネットで調べる
- ・取材：那覇市内で食堂を営む台湾の方など。報告をつながるに投稿

【9月】

- ・1学期の学習内容の復習。家庭訪問のときの中国語表現、贈り物の習慣などを学習
- ・羽衣学園高校にて「中国語に親しもう」ワークショップ（城間担当）

【10月】

- ・食事をご馳走になるときの中国語表現、中国の家庭料理などを学習
- ・第2回テレビ会議：各校が公式キャラクターをプレゼンし投票で決定
- ・CMワークショップに向けた取材
- ・「気になるあの人を魅力的に伝えるCMづくり」ワークショップ（CMプランナーを講師に迎え、コンセプトづくりからムービーメーカーを使った映像制作までを体験、被写体を迎えて上映会）



【11月】

- ・CMワークショップの報告と、取材状況をつながるに投稿（～12月）
- ・放課後や週末の過ごし方についての中国語表現学習、中国4大料理の特徴について調べ学習
- ・第3回テレビ会議：CMワークショップ報告、取材状況報告、Tシャツデザインプレゼン・決定
- ・CMのグループ分け（3校混合×3グループ）

【12月】

- ・グループごとに取材してPPTにまとめる。つながるにも投稿
- ・25(日)～28(水) 各校有志、台湾KIHS訪問：CMのコンセプト・テーマ・ストーリーをディスカッションして決定。ムービーメーカーで映像制作
- ・帰国後、生徒は自主的に、メールや電話 Facebookなどでやりとり

【1～3月】

- ・自分の趣味や日常の行動についての中国語表現、友人にメールを送るときの中国語表現学習
- ・KIHSメンバーとやりとりしながらCMの再編集作業
- ・3言語（中、英、日）バージョンのCM完成、校内で上映会
- ・プロジェクト全体のふりかえり

4. 研究の成果と課題

(1) アンケート・インタビュー調査に見られる成果

2012年2月に、向陽高校のプロジェクト参加生徒全10名を対象に、中国語および英語でのコミュニケーション、共同活動、ICTの利用、その他について、自由記述式のアンケートと個別インタビューを行い、10名全員から計199件の回答を得た。これらの回答を、『外国語学習のめやす2012』（2012、公益財団法人国際文化フォーラム）の指標「3領域×3能力+3連携」のうち、下記「3領域×3能力」を使って整理した。

『外国語学習のめやす2012』3領域×3能力

	能力		
	わかる	できる	つながる
言語	A 自他の言語がわかる	B 学習対象言語を運用できる	C 学習対象言語を使って他者とつながる
	a. 学習対象言語の文字・音声・語彙・表現（文法・語法）について知り、そのしくみを理解する b. 学習対象言語について新たな発見をしたり、母語と比較してその違いに気づいたりする	a. 学習対象言語を使って、身近な事柄や関心のある事柄について、自分の気持ちや考え、情報を伝えたり、相手の気持ちや考え、情報を理解したり、相手とやりとりをして運用することができる b. 学習対象言語と母語を比較して、その共通性や相違性、関係性を探究して分析することができる c. 言語的能力のギャップを埋めて、コミュニケーションを成立させるために、さまざまな言語および非言語ストラテジーを使うことができる	a. 学習対象言語や母語を使って、積極的かつ主体的に他者と対話をして、相互作用しながら共に関係を作りあげていく
文化	D 自他の文化がわかる	E 多様な文化を運用できる	F 多様な文化的背景をもつ人とつながる
	a. 学習対象文化に関して表象するさまざまな文化事象（事物や行動）について知り、理解する b. 学習対象の文化事象を観察して新たな発見をしたり、自文化や自分が知っている文化と比較して、その違いや関係性に気づいたり、推測したりする	a. 学習対象文化と自文化をはじめ、多様な文化事象を比較して、知識・情報を活用しながら、共通性や相違性を分析することができる b. 文化事象間の異同の事由および文化事象の背景にある考え方や価値などを探究し、自分の考えを表明することができる c. 文化事象の分析を通して、文化の多様性や可変性といった文化を見る視点を身につけ、自文化を再認識したり、ほかの文化事象に適用したりすることができる d. 自他の文化をはじめ、異文化間の相違性から生じる誤解や摩擦、緊張関係を調整したり、妥協点を探ったりして、協力して問題を解決することができる	a. 多様な文化的背景をもつ人びとと主体的かつ積極的に関わり、相互に作用しながら、軋轢や摩擦を乗り越えてつきあう
グローバル社会	G グローバル社会の特徴や課題がわかる	H 21世紀型スキルを運用できる	I グローバル社会とつながる
	a. グローバル社会（自分・学校・身近な地域社会・日本社会・広域地域社会・世界が緊密につながる21世紀の多言語多文化社会）の一員としての自覚をもち、グローバル社会の特徴や直面する課題について理解する b. グローバル社会に生きるために、21世紀型スキルを身につけることが必要であることを理解する	a. さまざまな文化的背景をもつグループの一員として、メンバーと意見を交換したり、グループ全体の目標を達成するために、自分の役割を責任をもって果たすことができる（協働） b. 問題を解決するために、資料、状況を客観的に解釈・分析・吟味して判断し、自らの考えを根拠に基づいて表明することができる（高度思考） c. 情報を収集・編集・発信する際に、情報・メディア・テクノロジー（ICT）の特性をいかして、相互作用的に活用することができる（情報活用）	a. 人・モノ・情報にアクセスして、自分とつながりのあるグローバル社会のネットワークに関わり、ネットワーク全体の目標達成やグローバル社会づくりのために、自分の能力、知識、時間などを提供したり、メンバーと助けあい協力して行動する

その結果、下記のように分類された。内容によって複数の項目に該当する回答もあった。

【A-a】 該当件数 14

「リスニングの力がついた。中国語検定試験で聴解問題をといているときに、やばい、わかるって思った」ほか

【A-b】 該当件数 13

「苦手だった発音のイメージがもてるようになった。たとえば、an の発音が台湾の人の発音を聞いて、はっきり分かるようになった」ほか

【B-a】 該当件数 18

「CMづくりで、自分の意見を言って相手が理解してくれたとき、単語並べるだけでもけっこう通じるって思った」ほか

【B-b】 該当件数 1

「日本語と中国語は、ことばの組み立てかたが違う。日本語を中国語に訳そうとしてもうまくいかなかった。自分の知ってる中国語を使って組み立てようと考えを切り替えたら、日本語で考えて中国語に訳そう

と考えてたときよりも、楽になったし、伝わるようになった」

【B-c】 該当件数 22

「聞き取りは少しはできたけど、中国語で答えるのが難しかった。そんな時はジェスチャーや簡単な中国語や英語を使ってコミュニケーションをとるようにした。そうしたら、相手もうなずいてくれて、ジェスチャーでコミュニケーションを取ってくれるようになった。Googleの翻訳サイトを使ってコミュニケーションを取ってくれたりもした」

【C-a】 該当件数 65

「ホームステイ先の子と話して、お互いの言いたいことをわかりあえたときに、相手の女の子がすごくうれしそうな顔をして、それを見たら自分もうれしくなって、もっとしゃべりたくなった。がんばった達成感があった」ほか

【D-a】 該当件数 3

「違う文化に触れてそこで生活したから知識や経験が増えた」ほか

【D-b】 該当件数 7

「KIHSの生徒は積極的で一生懸命盛りあげようとしていた。冷めていない。向陽は消極的だと思う」ほか

【E-a】 該当件数 5

「地域が違えばものの考え方も違うんだなと思った。テレビ会議のとき、自分たちはじーっとしてたり、こそこそ話したりしてたけど、台湾の人たちは画面見ながらみんなで笑ったり、盛り上がったりしてた。キャラクター案をプレゼンしたときも、向陽はみんなの作品を公平に見ようとしてたけど、大阪の人たちは大阪のがいちばんって感じだったし、台湾の人たちは地球がモチーフのデザインだったりとか発想のスケールが大きかった。自分はたこ焼き食べてるシーサーとかローカルな感じ」ほか

【E-b】 該当件数 8

「台湾のホストファミリーの子からのメールに、もっと、自分の気持ちを伝えるべきだよって書かれてた。いつも台湾では、『大丈夫です、いいです』とか遠慮していた。相手にとって迷惑だと思ったから、そういうことを言っていたのに、相手はもっと甘えてほしかったみたい。伝えようとする気持ちがどんなに大切なかがわかった」ほか

【E-c】 該当件数 0

【E-d】 該当件数 11

「向陽でのCMづくりで、意見が食い違ってなかなかまとまらなかった。そこで、1人1人のアイデアを出し合い、それをミックスすればいいんじゃないってなって。最後は何とかまとまった。みんな納得のいくものになったと思う」ほか



【F-a】 該当件数 57

「(台湾での)1日目は自分たちしか意見言っていなかった気がする。2日目は、KIHSの人たちはどうかって自分たちから意見を聞いて言ってもらった。そしたらいいアイデアが多くて、聞く前よりさらにいい作品にできたんじゃないかと思う」ほか

【G-a】 該当件数 0

【G-b】 該当件数 17

「人と話すための語学。受験のために勉強するんじゃないなあ、ちょっと考えが違ってたかなあって思っ

た。今までは勉強してても、なんで勉強してるかわかんなかった。勉強してもいかさないの意味がないと思った。たぶんこれからも、英語、中国語を勉強していかす機会があるからそのためにも備えておきたい」ほか

【H-a】 該当件数 35

「最初は自分は聞く側だった。同じグループの M さんがいろんな意見やアイデアを言うのを、わたしと A は聞いて『ああ、いいんじゃないかなあ』って感じ。積極的にビシバシ言う M さんを見て、すごいなあって。そのうち自分たちも刺激されて意見を言うようになった。会話を重ねるごとに、自分の意見を言えるようになり、相手の意見も聞こうと思うようになった。そういう過程を通して、グループの人たちと素直に言いあえるようになった。自分の意見を言うことで、もっといいものに変えていけることもあるって知った。みんなの意見をとりこんだ CM がつくりたいと思った」ほか

【H-b】 該当件数 3

「意見がなかなかまとまらなくて、どうしたらいいかいっぱい考えた。日本側がいいと思っても、台湾の人たちがいいと思わなかったり。最初はそれぞれの意見を聞いて、それをうまくまぜあわせたいって思った。でもそのうち、こっちを入れて、あっちも入れたら矛盾が出てきたりして。いろんな人の意見をぜんぶいれればいいわけじゃない。まとめられなくなっちゃうので、似たようなものをしぼって一つにまとめたり、組み合わせたりした。ポップカルチャーのテーマ選びでは、音楽でもマンガでも、著作権とかからんでくる。もっと幅広くみていかなくちゃいけないなって話になった」ほか

【H-c】 該当件数 34

「台湾からの帰国後、KIHS の子と Facebook でチャットを続けている。チャットはスピードが必要、その場で考えないといけない。最初はそれが苦痛だったけど、中国語でのチャットを繰り返していったら、スピードにだんだんなれてきて、まだまだなんだけど、その場で考えることも楽しくなってきた」ほか

【I-a】 該当件数 92

「もともと自分の意見はあまり言わないほうで、いつも人に頼ってた。今回は、逆に頼られる立場になってしまって、自分が言うしかない状況だった。CM づくりで、沖縄で調べてきたことを話すときに、KIHS のみんなが『わかるよ』とか一つひとつ反応してくれたことで、ちょっと自信がでてきた。これまでは、『はっ!? わかんない』って言われるのがこわくて、英語や中国語を話したくなかった。でも、KIHS のみんながやさしくて、むっちゃ聞いてくれたので安心して、伝わるんだったら、もう少し話してみようかなって思えた」ほか

【該当なし】 25

この結果、「C 学習言語を使って他者とつながる」「F 多様な文化的背景をもつ人とつながる」「I グローバル社会とつながる」の項目について該当する回答が多いことがわかった。「D 自他の文化がわかる」「E 多様な文化を応用できる」「G グローバル社会の特徴や課題がわかる」については、該当する回答が少なかった。

(2) 中国語学習との連携

使用教科書『高校生からの中国語 2』（2011, 小溪教材研究チーム, 白帝社）は、日本の高校生が中国に出発しホームステイや学校訪問を体験して帰国するまでをストーリー化した内容であり、自己紹介、学校生活などについてのやりとり、email の書き方など、学習した内容を実際のコミュニケーションで使うという流れが作りやすかった。一方、取材やディスカッションに必要な表現には、教科書で補いきれないものもあり、活動内容と学習内容をより連携させた授業計画が必要である。また、活動の目的に合わせた評

価方法は今後の重要な課題である。

(3) 活動の手法

CMづくりは、「人に伝える」ということを意識できる、取材から制作までの過程で協働を組み込みやすい、ICTをコミュニケーションや表現・創造のツールとして位置づけられるという利点があった。一方、「3つの地域のつながりのよさを伝える」というテーマ設定は、生徒がリアリティをもちきれなかった面もある。インターネット上のやりとりは、前半の沖縄と大阪の生徒の交流はつながるで行えたが、後半は、Facebookを日常的に利用し即時性のあるコミュニケーションに慣れている台湾 KIHS の生徒に、投稿内容を管理者がチェックして掲載する「つながる」の利用が定着しなかった。日本の公立校では Facebook の利用は難しく、インターネット上で事前に取材内容について共有することが難しかった。Skype や Adobe Connect などを利用した TV 会議は、生徒が短期的な目標をもち、プロジェクトに取り組むモチベーションを確認するのに有効であった。一方、3 地点以上を結んだ場合にスムーズに作動しない現象も見られた。



5. 今後の展望

2012 年度は、今年度の実践の成果と課題をふまえ、引き続き稲垣忠・東北学院大学准教授の協力を得ながら、中国学習と交流・共同活動の連繫をさらに明確に位置づけたカリキュラムを作成するとともに、ポートフォリオやルーブリックなどを取り入れた評価を試みる。また、2012 年 6 月に行われる高等学校中国語教育研究会と中国語教育学会の合同研究大会や、国内外の初中等教育における言語教育を支援している財団のウェブサイトおよび機関誌等で研究成果を発表する予定である。2013 年度は、3 年間の実践研究を総括し、多様な背景をもつ同世代とコミュニケーションする力、協働する力、および ICT リテラシーの育成をめざした外国語教育のモデルの一つとして、沖縄県高等学校中国語教育研究会や高等学校中国語教育研究会（全国組織）等の教師研修活動等を通じ、外国語を中心とする教員・教育関係者と広く共有していく予定である。

参考文献：「外国語学習のめやす 2012」公益財団法人国際文化フォーラム